

令和8年4月10日

稲作情報 第3号



中央部営農センター	TEL: 22-2127	北部営農センター	TEL: 65-2016
東部営農センター	TEL: 55-4712	西部営農センター	TEL: 32-3160
営農経済部米穀課	TEL: 27-1601	由利地域振興局 農業振興普及課	TEL: 22-8354

令和8年産も本格作業がスタートしております。苗半作というように、質の良い苗を作ることが、生育が旺盛で単収を上げる稲作へつながります。

●播種作業について

ポイント① (播種作業時)

播種作業は気温の低い日を行って行くことが基本となります。播種時には苗箱へ水も同時に灌注するため、気温が低いと苗箱内の温度も低下します。出芽する際の温度ムラや低温によるカビの発生など出芽条件が悪くなりますので、天候が安定している日に行いましょう。

また、播種時の灌注する水量は多いと種子粒の酸欠状態を招き、少ないと乾燥して発芽に必要な水分が十分に届かないため、作業時は水量を確認しながら調整をお願いします。

ポイント② (苗箱を並べる際の環境と対策)

ハウス内に苗箱を並べた際に日射量が多い場合や、温度が高い場合は高温障害の対策を行ってください。播種後から1週間の期間が高温障害発生リスクが高いです。被覆資材内はハウス内温度よりもさらに温度が高まります。被覆資材をかけている期間は積極的にハウスを開放し、換気してください。太陽シートやピアレスシートなどハウスを開放しなくても大丈夫となっている資材を活用している場合であっても、苗焼けが発生した事例がありますので、よく観察しながら必要に応じてハウスを開放して換気しましょう。

また、露地プールでの育苗を行う際は、風などで被覆資材が飛ばないように縁を重りで抑えるなどしましょう。

ポイント③ (床土と覆土)

苗箱の床土と覆土のバランスは重要です。床土が多いと覆土が薄くなり、種粒が露出してしまいます。一方で覆土が多い場合は床土が減り、苗の根張りによるマット形成の強度が低下します。また、覆土が厚いと土によっては締まりが発生します。種粒に圧力が加わることで、酸欠を招くほか出芽に影響します。

育苗マットを使用する場合は、マットに水分を十分に含ませてから使用しましょう。軽量で使いやすいですが、乾燥もしやすいため、ご注意ください。

●育苗管理について

ポイント① (適正温度)

良い苗作りのためには温度管理が重要です。特に高温障害には注意が必要です。

生育ステージ	稚苗	中苗
出芽期	20～30℃	20～30℃
1.5葉期まで	日中：20～25℃ 夜間：10～12℃以上	日中：25℃以下 夜間：5℃以上
2.5葉期まで	日中：15～20℃ 夜間：5℃以上	日中：15～20℃ 夜間：5℃以上
3.5葉期まで		寒くない限り昼夜ハウスを開放

ポイント② (良い苗姿)

稚苗 (~2.5葉)

播種量：130～150 g /箱 (乾粒重)

育苗日数：27日以内

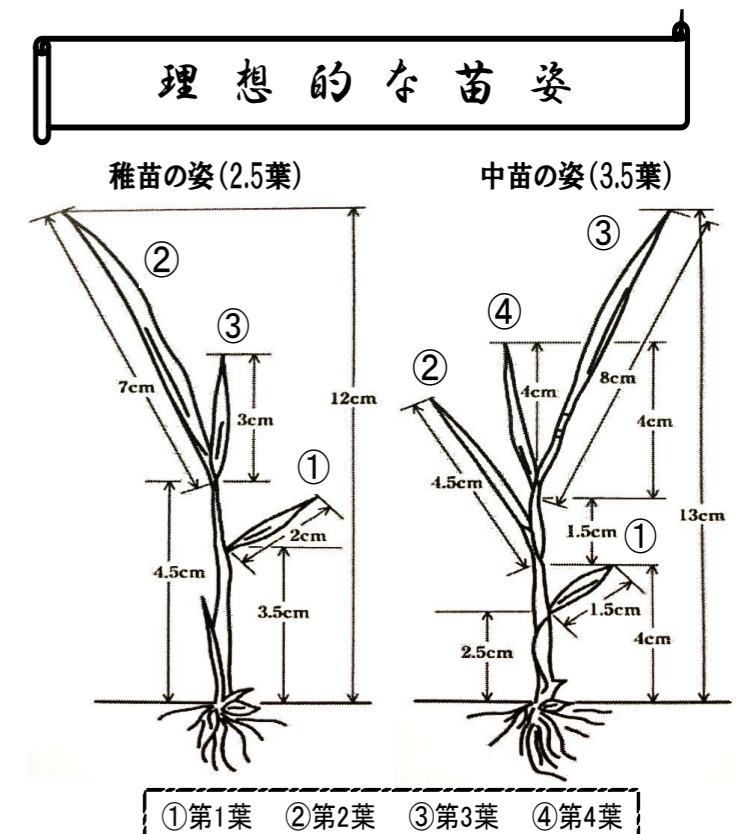
出芽長：0.5～1cm

中苗 (~3.5葉)

播種量：100～110 g /箱 (乾粒重)

育苗日数：32日以内

出芽長：0.5cm



ハウス内には温度計を設置し、こまめに確認しましょう。曇天であってもハウス内は温度が上昇します。ハウス内が高温になってくると、リゾプス菌(苗箱の表面に白い綿のようなカビ)が発生してきます。この症状が見られる場合は温度が高い環境になっているサインです。

また、わずかにでも異変を感じる場合はJAへご相談下さい。

ポイント③（生育のバラつき対策）

出芽にバラつきがある場合は、部分的にホットンカバーや半透明になっているラブリットなどを活用することで保温効果を高め、生育を揃えます。

また、生育のバラつきや高温障害の発生には活力剤の使用も有効な手段です。

「コーゲンGエース」 正味重量1kg 水250LにコーゲンGを500ml（500倍） 250Lで500箱分（1箱あたり500ml灌注）	「ケルパック66」 水100Lにケルパックを100ml（1000倍） 100Lで500箱分（1箱あたり200ml灌注）
「ファイトO2」 水250LにファイトO2を500ml（500倍） 250Lで500箱分（1箱あたり500ml灌注）	「活水」 水100Lに活水を500ml（200倍） 100Lで500箱分（1箱あたり200ml灌注）

ポイント④（育苗期追肥）

ロング育苗肥料を使用していない場合や、育苗マットを使用している場合は、育苗期追肥を実施しましょう。

- ・ 稚苗（130～150g 播き）1.5葉期に箱当たり1g（N成分で）施用する。
- ・ 中苗（100～110g 播き）2葉期と3葉期にそれぞれ箱あたり1g（N成分で）施用する。

液肥2号：水100Lに2kg溶かし、200箱に灌注する。

※硫安も追肥肥料として活用できますが、葉焼けが発生する可能性がありますので、推奨しません。

ポイント⑤（水やり）

育苗期の水やりは苗が大きくなるにつれ、量を増やしていきます。出芽したばかりの段階から大量に水を与えると、過湿による生育不良や病害の発生原因になりますので注意しましょう。特に高温障害などによる生育不良に対しての大量灌水は逆効果となりますので注意しましょう。

●プール育苗について

プール育苗は灌水の手間を省き、温度管理を容易にする省力技術です。取り組む際のポイントを確認しましょう。

①整地 ⇒ 露地もしくはハウス内であっても地面の均平が重要です。均平にならない場合は区画を分割するなど高低差を少なくしましょう。

②プール下敷き資材 ⇒ 水を通さない素材で穴が無ければ問題ありません。強度を上げるため、二重敷きを推奨します。

③プール外枠資材 ⇒ 土や角材を用いて高さ15cm程度の枠を作成します。育苗箱とふちの間隔をとり、入水時の水回りを良くしましょう。

※露地でプール育苗を行う際はハウス内での育苗と比較し、温度管理が難しくなります。低温や霜が降りるような場合はホットンカバーなどで被覆できるような準備をしましょう。

また、露地プールは鳥害を受けやすくなりますので、育苗箱の上にネットを張るなどの対策を実施すると良いです。



④入水のタイミング ⇒ プール育苗において入水のタイミングは非常に重要です。入水するタイミングによっては苗が上手く生育しません。

苗の1葉が展開するまでは水を入れずに通常の管理をします。早すぎる入水により出芽の遅い部分が酸欠になり、そのまま出芽しない事例もあります。

また、プール育苗は苗丈が伸びやすい傾向があります。水温が高いと苗丈の伸長を助長しますので、気温が高まり水温も上がる場合は適度に入れ替えを行いましょう。

プール内で同じ水をずっと停滞させておくことも衛生的に良くないため、水に汚れが出たら交換しましょう。

プール育苗の水位は育苗箱より少し下位になるよう設定しましょう。

●育苗期病害対策について

①（リゾープス菌）白いくもの巣状カビ ⇒ ハウス開放（高温抑制）

【薬剤】ダコニール1000 500倍希釈 箱あたり500ml

②（ピシウム菌）坪状の枯れ・ムレ苗

【薬剤】タチガレエースM液剤 500倍希釈 箱あたり500ml

ナエファインフロアブル 1000倍希釈 箱あたり500ml

③（フザリウム菌）根と苗の地際部分が褐変・赤カビ

【薬剤】タチガレエースM液剤 500倍希釈 箱あたり500ml

④（トリコデルマ菌）青カビ ⇒ 土壌を過乾燥にしない

【薬剤】ベンレート水和剤 500倍希釈 箱あたり500ml

稲作メールの
配信登録はこちら
から！

